

19 世紀末のイギリスにおける 邦人の柔術講演

——志立鉄次郎の柔術論——

小 野 勝 敏

はじめに

1. 志立鉄次郎はいかなる人物か
2. 『ロンドン日本協会紀要』に掲載された志立論文
3. 志立論文の梗概
4. 嘉納論文の影響
5. 『サタデーレビュー』の論評と志立の反論

おわりに

はじめに

志立鉄次郎(シダチ テツジロウ)は、1892(明治25)年4月29日、ロンドンにおける「ロンドン日本協会(THE JAPAN SOCIETY, LONDON)」の設立総会において、「柔術——からだの早業による古来の護身術(“JU-JITSU; The Ancient Art of Self-Defence by Sleight of Body”〔以下『JU-JITSU』と略す])」なる題名の講演と柔道の実演を披露した。この講演は、海外で実演を伴う柔術・柔道講演の嚆矢と考えられる。

この志立の講演内容は、翌1893(明治26)年に発行された『ロンドン日本協会紀要・第1巻』(*Transactions and Proceedings of the Japan Society, London, Vol. 1.*

〔以下『紀要』という〕¹⁾に掲載された。

この『紀要』の中で志立は、「数年前〔1889年—小野注〕に、日本アジア協会会誌 (*Transactions of the Asiatic Society of Japan* 〔以下『会誌』という〕) に数編の柔術論文が上梓されているが、それに関する書籍は未だ1冊も出版されていない」という²⁾。

この『会誌』にある数編の論文とは、どのようなものであろうか。

後にみるが、志立が日本銀行の命により欧米への留学の途についたのは、1890 (明治23) 年6月のことであった。したがって、この留学数年前に日本で公刊された柔術・柔道に関する邦文と英文の論稿は、『会誌』の1編を含め次の3点が考えられる。

- ① Rev. T. Lindsay and J. Kano. “JIUJUTSU: *The Old Samurai Art of Fighting without Weapons.*”³⁾
- ② 嘉納治五郎「柔術及び其起源」, 「柔術及び其起源 (承前)」⁴⁾
- ③ 嘉納治五郎「柔道一斑並ニ其教育上ノ価値」⁵⁾

上記論稿の著者名より、志立の留学前数年内に刊行された、柔術・柔道に関する論文には、すべて嘉納治五郎が関わっていることがわかる。このうち上記に示した論稿①の論文は、先にみた志立のいう『会誌』の第16巻第2号に掲載されている。しかし、この他に該当する論文は見当たらない。すなわち、数編ではなく、1889年の1編のみしか公刊されていない、といえる。志立の誤解と思われる。

論稿②と③の論文は、志立がロンドンに出発する前に嘉納によって編まれた著作であるので、志立講演の参考資料として目を通した可能性が考えられる。以下では、志立論文とこれら3編との関わりについて考えてみたい。

そこで、本稿では、志立論文の内容を概説し、志立独自の柔術・柔道論を展開しているかを、先にみた3編の嘉納論文と対比させて考えてみる。

また、志立の講演は、その8日後に英字新聞『サタデーレビュー (*The Saturday Review*)』で論評された。この記事に対する志立の反論も『紀要』に

掲載されているので、この論争の紹介記事とその記事に対する志立の反論およびイギリスにおける日本文化の紹介についてもふれておきたい。

1. 志立鉄次郎はいかなる人物か

(1) 志立の経歴

志立鉄次郎は、明治に先立つ1865（慶応元）年6月9日、旧松江藩士・志立範蔵の次男として、島根県松江市にて誕生する（『昭和戦前財界人名大辞典』1993年）。

1885（明治18）年に東京大学予備門文科（向陵駒場同窓会『会員名簿』昭和40年）を経て、1889（明治22）年7月、帝国大学法科大学を卒業する。卒業した同月、日本銀行に入行する。翌1890年6月より1893年10月までの3年5カ月の期間、日本銀行の命により「欧米に留学」する⁶⁾。

1897年頃までの日本は、諸外国より「御雇外国人」を招聘し、いろいろの分野の近代化を推進する原動力とした。他方、日本人もイギリス、フランス、ロシア、ドイツ、アメリカなどに留学生を送り、西洋文明を積極的に導入した。

志立の留学は、この一環であろう。

ちなみに彼は、後の1913（大正2）年2月より1918年2月までの5年間、日本興業銀行の総裁に就任している（日本興業銀行本店広報室）。したがって、日本における金融界の重鎮であったことがうかがわれる人物でもあった。また、大正期には、講道館の評議員も務めていたことが知られる⁷⁾。

(2) 志立の柔道歴

志立の講道館への入門は、帝国大学に在学中の 1888 (明治 21) 年 6 月 28 日
で、翌 1889 年 5 月に初段、1905 年 8 月 20 日に三段に昇段している (講道館
データ管理課)。このことは、欧米に留学する 1 年ほど前、すなわち大学卒業
の直前に初段に昇段したことになる⁸⁾。志立が柔道の修行を開始したのは、
実は、講道館に入門した時点からではなく、少なくとも帝国大学に在学中も
しくはそれ以前であることがわかる。なぜなら、帝国大学の学内に柔術⁹⁾と
剣術の道場が新設されたのは 1887 (明治 20) 年のことであり、この帝国大学
道場での修行者の中に、志立鉄次郎の名前をみいだすことができるからであ
る¹⁰⁾。

したがって、後にふれるが、1892 年 4 月における講演当時の志立には、
柔道の修行期間が少なくとも足掛け 3 年はあるし、初段であることから、柔
道の技量と知識をそれなりに有していた、といえるのである。それに、年齢
は 26 歳 10 カ月と若く、体力的にも柔道紹介者として満足すべき条件を有し
ていた、といえよう。

以上より、志立は現在の東京大学の出身で嘉納の後輩であり、しかも、講
道館の門下生でもあるし、1860 年生まれの嘉納とは 5 歳しか離れていない
ことがわかる。

これらのことから、講演当時の志立と嘉納との関わりは、決して浅いもの
ではなかったと推論できよう。

それゆえ、欧米への留学に際して、「はじめに」で掲げた論稿①、②、③
の嘉納論文などの柔道資料をロンドンまで持参した、もしくはその後、当地
に送られた可能性が考えられるのである。

2. 『ロンドン日本協会紀要』に 掲載された志立論文

「ロンドン日本協会」は、1892年1月28日、日本の現状とこれまでの経済、生活、芸術、科学、産業事情など、日本に関するすべての研究を奨励することを目的として、ロンドンで設立された。

この設立総会が、1892年4月29日、ロンドンのアデルフィのジョーン街にある芸術協会会館（The Hall of the Society of Arts）において、午後8時30分より開催された。

ちなみに、このロンドン日本協会設立の初代会長は、在英日本公使の川瀬真孝子爵であり、設立時の会員は190名（1892年1月28日現在）であった¹¹⁾。

この総会で志立は、呉大五郎（日本総領事館一等書記官/ロンドン日本協会名誉幹事・会計代理）を柔道実演の助手として『JU-JITSU』と題する講演と柔道実演を披露した。この講演題目は、イギリスに滞在していた日本人会員のなかで志立の「柔道」が、日本文化・日本事情を代表するに最もふさわしいテーマとして選ばれたことを、如実に物語っている。

志立講演と実演の様態そして『サタデーレビュー』紙における論評およびその講評に対する志立の反論は、先にみた『紀要』に掲載されている。

これらの内容は、後にふれることになる。

3. 志立論文の梗概

志立論文は、原文で18ページ程の分量である。この内容は、大小の見出しごとに区切られたコンパクトな構成とはなっていないが、次に掲げる(1)～

(5)のように見出しを5分類して、ざっとその内容を紹介してみる。

文中には、イサヤマ (R. Isayama) なる画家の挿絵が4点挿入されている。この画家の人物像は不明であるが、当時、ロンドンに在住していた日本人画家であろう。その挿絵は、ともえ投、一本背負投、送襟絞、当身技の4種類である。これらの技法は、講演当日、志立と呉により実際に示範された。

上記のごとく、志立論文には見出しがつけられていない。したがって、引用者(小野)が内容に応じて5分類し、その概観を次のように紹介してみる。

このうち、以下の(1)、(2)、(5)は柔術論、(3)、(4)は柔道論に関する内容となっている。

(1) 日本独自の武芸たる柔術

西欧においても東洋においても、軍事的技術として弓矢、刀、乗馬、槍などが使われてきたが、それらの技法は、両地域において大差はない。しかし、私(志立を指す—小野注)がこれからお話する柔術は、「相手の力を利用することによって、勝利をうる」という独特の技術であり、これは日本独自の技で、ヨーロッパでは使われていない別個の技術である。

ヨーロッパでなされているレスリングこそが、この柔術に比肩しうるものだという人がいるかもしれないが、それは柔術とはまったく違うものである。

なぜなら、レスリングは自身の力による勝利を目指しているが、柔術は相手の力を利用することによって勝利をうるものだからである。柔術という言葉の意味は、柔らかい術である。すなわち、力に逆らわないことによって勝利をうる武術と定義することができるのである(『紀要』4-5ページ参照)。

このように志立は柔術とレスリングとは別個の技術としている。すなわち、柔術を日本の独自の武芸としているのである。

嘉納治五郎もこのイギリスのレスリングについて次のように説明し、志立の見解と同じ考えを表明している。

柔術・柔道は「レスリングに似ているが、イギリスでされているレスリングとは本質的に異なっていて、その主な原理は、力をもって力に対するのではなく、力に逆らわずに勝利を得ることである」と述べている¹²⁾。

（2）柔術の陳元賛伝來說

陳元賛は、中国・明王朝末期の1659（万治2）年に来日し、拳法を福野七郎右衛門、磯貝次郎左衛門、三浦与次右衛門の3人のサムライに伝授した。この3氏が三派三様の柔術を設立し、国内に伝播させたことが、陳の柔術鼻祖説の根拠となっている¹³⁾。

しかし、陳は柔術の鼻祖たりえないと志立はいう。すなわち、このような陳伝來說が流布したのは、中国の文明が、現在のヨーロッパ文明と同じように高い評価がなされていて、柔術に付加価値を与えるために、柔術の起源が中国つまりは中国人の陳に帰せられたがためというのである。

陳が来日した1659年以前にわが国には、1532（天文元）年に起源を発する竹内流が存するし、17世紀の中頃までには、柔術の起倒流、直信流などの諸流派がすでに存在していた。

すなわち、陳の来日以前に、わが国にはすでに柔術が存し、陳の柔術起源説が崩壊すると述べている（『紀要』5-8ページ参照）。

しかし、志立は、陳のわが柔術への影響は皆無ではなく、ある程度の刺激を与えたということはあるようだ、という。なぜなら、柔道の技法は、投げ技、固め技、当身技の3技に大別できるが、このうち陳の拳法が、柔術の起倒流および天神真楊流の2流を主に学んだ嘉納の、講道館柔道の当身技に与えた影響を無視できないからである¹⁴⁾。

（3）講道館柔道の創始と現状

恩師・嘉納治五郎は、柔術の天神真楊流と起倒流の他に、諸流派の調査と比較をし、講道館柔道を1882（明治15）年に創始した。

柔道という名称は、江戸時代の柔術の二つの流派ですでに使われていたが、それを参考にして命名したものである。

柔術は単に闘争の目的のみにて実践したが、この実践以外には何も教えなかった。しかし柔道は、身体的活動ばかりか、道徳的・知的訓練の修養の場としての実践である。もちろん、実践にも重要な価値をおいているが、それは理論の裏づけのある実践だという。そして、柔道の目標は、心技体の向上であり、その向上に有益な運動でもあるという。

東京には、嘉納と高弟が指導する道場があり、講道館、警視庁、海軍兵学校、一高、三高、五高、学習院、慶応、帝大で柔道の指導がなされている。ここでは、授業料は無料で、柔道衣以外は一銭のお金もかからない、ともいう（『紀要』8-9ページ参照）。

このように講道館柔道の創設、目的そして現状について言及している。

(4) 柔道の実演

志立は、先にみた呉大五郎を助手として、タキシードを着用したままの姿で、柔道の各種の模範演技——投技、抑込技、絞技、関節技、活法の実際について披露した。

このうち活法については、絞められたり、急所を打たれたり、溺れたりして仮死状態にある人の意識を蘇生させるための方法である。この方法は、ある高い段階に達した弟子のみに教えられるが、必ずしも高度な教義ではない、という（『紀要』10-11ページ参照）。

志立が黒板に柔道用語を板書している短い時間に、柔道の「受」を引き受けた経緯について、呉は次のように述べている。

呉は、「ロンドン日本協会」の幹事を務めていたが、「志立の模範演技の受を引き受ける義務を課せられるとは夢想だにできなかった」という。なぜなら、「柔道に精通していないずぶの素人であるからです」と。しかし、「協会のために自分を犠牲にして、最善をつくしたい」という。「どうぞ、協会の

利益となるために生贄になる自分を哀れんでください」と述べている（『紀要』15ページ参照）。

この志立と呉の演技について、「いくつかの技法が機敏に示範されたが、実演の終了時には、両者のタキシードがほんの少し乱れたのみであった」と『紀要』の編集者は述べている（『紀要』3ページ参照）。

両者による柔道の実演は、水が流れるように流暢でなく、多少はギスギスした演技であったと推察できよう。なぜなら、呉はずぶの素人であるから。しかし、柔道がいかなる特質を有する武術であるかは、聴衆にアピールできたであろう。

（5）二人の老柔術家のエピソード

一人は江戸時代、もう一人は明治時代における老柔術家の秀でた技術・人物の紹介がなされている。

前者は、ある怪力男との勝負を殿様から命じられた老柔術家はこの勝負に敗退する。次にその弟子が相手をし、この怪力男の隙をみて、背負投で投げ飛ばし勝利をえる。これをみていた殿様は、弟子の技量を大いに誉め、老柔術家は面目を保つことができた、とする説話。

後者は、老師匠の弟子が、毎夜、自分の実力を試すために通行人を投げ飛ばしていた。ある夜、老師匠は、その暴漢を懲らしめるためにその場所に出かけた。暴漢が背後から抱きかかえにきたが、老師匠は、肘で相手の鳩尾を打ち、失神させ、このような行為をしないことを悟らせる説話（『紀要』12-14ページ参照）。

論稿①の中には、内容は異なるが以上のような二つの説話と同じ形式で、3例に分けて、江戸期における柔術家の活躍が比喩的に紹介されている。

4. 嘉納論文の影響

「はじめに」でみたように、志立が欧米に留学への途につく前に公刊された柔術・柔道に関する論文として、3編が考えられた。

講演の前に、志立がこれら3編を参照した可能性が考えられるので、それらの内容の見出し（小野作成）のみを列挙し、志立論文の発表形式や内容に、この3編がどのような影響を与えたかを考えてみる。

1888（明治21）年4月18日、帝国大学工科大学での「日本アジア協会」の例会で、「柔術——武器を使わないサムライの武術（以下『JIUJUTSU』と略す）」なるテーマの英文発表がトマス・リンゼーによってなされ、その後、会場が学内の講堂に移され、そこで嘉納治五郎によっていくつかの柔道実演がなされた¹⁵⁾。

このときの志立は、帝国大学法科大学の学生であり、柔道の修行をしていたと考えられるので、このT.リンゼーによる『JIUJUTSU』講演の傾聴と嘉納の柔道実演の見学をした可能性が生じる。

なぜなら、この講演の4年後に、志立はロンドンで『JU-JITSU』なる題名の講演をすることになるが、その講演と4年前の帝国大学でのT.リンゼーと嘉納のそれとで発表形式に同一性がみられるからである。つまり、彼は講演のみに終始せず、これに柔道の各種技法の実演を組み入れて披露したのである。

次に、先に掲げた志立論文の見出しと論稿①から③の3編の内容を列挙し、それらを比較して、志立論文への嘉納論文の影響についてみてみよう。

志立論文の見出し

- (1) 日本独自の武芸たる柔術
- (2) 柔術の陳元賛伝来説

- (3) 講道館柔道の創始と現状
- (4) 柔道の実演
- (5) 二人の老柔術家のエピソード

論稿①の見出し

- (1) 柔術の陳元賛始祖説と反駁
- (2) 柔術の歴史と諸流派
- (3) 投技と活法の説明
- (4) 高名な柔術家の話
- (5) 最近の柔道界の現状

論稿②の見出し

- (1) 柔術諸流派の歴史と現状
- (2) 柔術の陳元賛始祖説と反駁

論稿③の見出し

- (1) 柔術諸流派の起源
- (2) 柔術の陳元賛始祖説
- (3) 柔道の原理と特質
- (4) 柔道の諸技法の実演

上記①～③の論稿は、すべて、ほぼ同じ時期に嘉納治五郎によって起草されたものであるので、3編の内容は相互に、極めて密接な関わりを有していることがわかる。

他方、すでにみたように、志立論文の前半はほぼ柔術編、後半は柔道編で構成されている。この論文の見出しと上記論稿3編の見出し・内容とが、同じく極めて類似していることがわかるのである。

たとえば、柔術の歴史、陳元賛始祖説、柔術家のエピソード、柔道の現状そして柔道の実演に顕著である。このうちとくに、陳元賛の柔術始祖説については、上記4編ともそれなりのページ数で、かなり詳しい説明をしている

のである。

以上のことから、志立論文には、全体的にみて、彼の独創的な柔術論・柔道論の展開および発表形式や内容についての斬新さがあまりみられず、嘉納の論述・発表方式の多くを模倣していることが明らかであろう。

この模倣はやむをえないことである。すでにみたように、当時は、柔術や柔道の近代的な入門書・専門書は刊行されていないし、論文も嘉納のそれが3点しかない時代である。それに、志立は柔道の専門家ではないし、その紹介・普及を目的にしてロンドンに留学したわけでもなかったからである。

この志立の模倣については、一言断っておくべきであろう。すなわち、模倣は全体の構成・筋立てのみに限定され、文章の一字一句には少しも関わりがないことを、志立の名誉のために強調しておきたい。

5. 『サタデーレビュー』の論評と 志立の反論

先にみたが、「ロンドン日本協会」設立総会時の志立の講演内容『JU-JITSU』は、1893（明治26）年の『紀要』に掲載された。

この『紀要』に掲載された志立論文の講演時の論評が、講演8日後の1892（明治25）年5月7日付の英字紙『サタデーレビュー』に載せられている。この記事の筆者は不明であるが、以下に、その論評内容とそれに対する志立の反論についてふれておこう。

まず、志立講演についての論評の核心は、次のようにまとめることができよう。

『サタデーレビュー』の記者は、志立のいう柔術を「からだの早業による護身術」であり、「譲ることによって勝利をうる術」とし、講道館柔道の「柔の理」¹⁶⁾の原理を見事に喝破している。また、柔術はレスリングの完成した形で

あるとし、レスリングとの類似性を強調している。さらに、実演の「ともえ投」は、ヨーロッパのレスリングにおいても、容易な技として、よく知られている、との感想を述べている（『紀要』18-19ページ参照）。

この『サタデーレビュー』の記事について志立は、新聞への掲載はたいへん名誉に思うが、誤りを犯していると指摘している。

その誤りについて志立は、講演では柔術とレスリングとを区別して説明したにも拘わらず、英字紙の記事がそれらを同じものとして扱っていることに不満を漏らしている。この二つは類似しているように思われているが、たとえば「南の暖かい国からやってきた人が、雪を初めてみたときに、綿と間違えた誤り以上に愚かなこと」と指摘している。

志立は、もし私がレスリングを知らなかったら、柔術とレスリングが別のもつと説明することはできなかったが、私はそのレスリングを日本語と同じくらいによく理解しており、ただ、このレスリングは日本の格闘技の柔術でなく、相撲に似ている、という。技術はレスリングに必要なものであるけれども、それが主に力によって勝利をうることを目的としているのに対して、柔術は力に全くたよらないで勝利をうることを目的としていることが、両者の注目すべき違いではなかろうか、という。

また、柔術では、負傷者が生じることもない。これは、物理学的な法則と現象に逆らわないという根本原理に基づいているからである。したがって、私たち二人のワイシャツの襟や胸、そしてタキシードは、講演後もほとんど乱れることはなかった。これは、「受」を務めた呉氏の腕前もさることながら、柔術自体の長所に起因している、と志立はいうのである（『紀要』19-21ページ参照）。

以上のように、志立は、ヨーロッパで実施されているレスリングと日本で発祥し発展した柔術とは、同じ格闘技であるが、本質的には別個の武芸である、としているのである。

おわりに

嘉納治五郎によって講道館柔道が創始されたのは、1882（明治15）年5月のことであった。この創始より10年後の志立講演なのである。

志立が講演をした1892（明治25）年当時の講道館柔道の技術面は、1887年前後にはほぼ完成の域に達していた¹⁷⁾。すなわち、講道館柔道の基礎がすでに確立していた時期での志立講演であったといえる。

しかし一方で、講道館柔道が創始されてから日も浅く、柔術とくに柔道という名称もまだ内外ともに市民権を得られていない時代での、イギリスにおける英語による講演でもあった。1892年5月7日付の『サタデーレビュー』の記事によれば、「柔術については、1862〔文久2〕年のロンドン万国博覧会における日本人村や他の場所でもって、もっとレベルの高いものや低い演技を見ることができる」とある¹⁸⁾。

これらのことから、志立の柔道実演すなわち日本文化の紹介は、ロンドンにおける最初のそれではなく、彼以前に、日本人の芸人（軽業・曲芸師）を通して、日本の風俗や生活ぶりを余興的にみせる興業の中で、柔術の披露がなされていたことが示唆される。しかし、講演が伴う本格的な柔道のデモンストレーションは、これまでのところ、志立をもって嚆矢とされよう。

しかしながら、当時のイギリスでは、遠い東の国・日本のこと、いわんや柔術・柔道のことはよく知られていなかったし関心もなかったことであろう。このような時代、英字紙『サタデーレビュー』に志立講演の論評とその論評に対する志立の反論および講演内容が『紀要』に掲載され、広く紹介されたことは、たとえ、イギリスの一握りの人々であったとしても、柔道ばかりか日本や日本人への理解をも促し、未知なる日本文化への関心を抱かせたことであろう。

この意味で、志立の講演と実演は評価できようし、後の日本柔道の国際化

のみならず、会員の出身地であるヨーロッパやアメリカでの柔道の啓蒙と普及の萌芽に、何らかの役割を果たす第一歩になったといえよう。

〔注〕

- 1) Tetsujiro Shidachi. 1893. "JU-JITSU: The Ancient Art of Self-Defence by Sleight of Body" *Transactions and Proceedings of the Japan Society, London*, Vol. I, pp.4-21.
〔拙訳「柔術——からだの早業による古来の護身術——」『岐阜経済大学論集』第29巻第4号、1996年3月。〕
- 2) *Ibid.*, p.4.
- 3) T. Lindsay and J. Kano. 1889. "JIUJUTSU: The old Samurai Art of Fighting without Weapons" *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Vol. XVI, No.2, pp.192-205.
〔拙訳「柔術——武器を使わないさむらいの武術——」『岐阜経済大学論集』第16巻第3号、1982年9月。〕
- 4) 嘉納治五郎「柔術及び其起源」『日本文学・第三』明治21年10月、28-33ページ、同「柔術及び其起源」『日本文学・第七』明治22年2月、28-30ページ。
〔この二つの論文は、明治21年8月、嘉納によって1週間にわたり講道館でなされた柔道講話に基づいている（講道館『嘉納治五郎』昭和52年、683ページ。〕
- 5) 嘉納治五郎「柔道一斑並ニ其教育上ノ価値」『大日本教育会雑誌』明治22年6月、446-481ページ。
〔この論文は、明治22年5月、大日本教育会の依頼により、嘉納によって講道館でなされた講演と実演に基づいている（老松信一『柔道百年』時事通信社、昭和45年、698-9ページ参照。〕
- 6) 注1)拙訳、190ページ参照。
- 7) 丸山三造『大日本柔道史』講道館、大正14年、追録・4ページ。
- 8) 注1)拙訳、190ページ参照。
- 9) 嘉納治五郎は、明治15年に講道館柔道を創設し、江戸時代より連綿と呼称されてきた柔術を柔道に変更した。この名称変更によって世間は直ちに柔道なる名前を受け入れたのではなく、長く柔術と柔道なる名称との共存がなされてきた。
嘉納が、講道館の門下生を全国の旧制高校と中学校の教員として派遣したこと、全国各地に講道館支部を組織した、ことさらに、明治37（1904）年の日露戦争における旅順閉塞作戦において、広瀬武夫、湯浅竹次郎などの門下生の活躍によって、徐々に講道館柔道の名声と実力が世間に喧伝されることになり、柔道という名称が世に受け入れられるようになる。
大正15（1926）年5月の『学校体操教授要目』の改正に伴い、これまで長く教科名称として使われてきた「柔術」がようやく「柔道」と変更され、日の目を見る

ことになる。法規上では、実に44年の長き年月を経ての名称・「柔道」への改正であった。

10) 老松信一，前掲書，55 ページ。

11) Tetsujiro Shidachi, *op. cit.*, p. viii.

〔ちなみに、設立約1年後の翌年4月30日段階の会員数は、430名と増加している。この会員の構成は、名誉会員13名、正会員361名、賛成会員56名となっている。国別では、日本が40名と一番多く、次いでフランス20名、ドイツ16名、アメリカ8名、ハンガリー6名、オーストリア4名、イタリー3名、ベルギー・オランダ2名、デンマーク1名の順となっていて、日本以外の会員は、ヨーロッパとアメリカであることがわかる。また、この外国人のうち、日本に滞在もしくは訪日経験のある会員は179名とあり、かなりの会員がそれなりの日本通であることもわかる (*ibid.*, p.199)。〕

12) T. Lindsay and J. Kano, *op. cit.*, p. 192.

13) 陳元贊の柔術始祖説は、近世に刊行された『起倒流燈下問答』、『武術流祖録』、『尾張名所図会』、『良移心頭流秘書』、『本朝武芸小伝』、『先哲叢談』などに記載されている。

14) 陳元贊伝來說については、以前にふれたので、参照されたい(拙稿「柔道伝來說小考」『岐阜経済大学論集』第22巻第2・3号，1988年11月)。

15) T. Lindsay and J. Kano, *op. cit.*, p. xvi.

16) 柔道の攻撃防御の一つの基本的原理であり、相手の力に抵抗せずに、これに順応しながら相手を制する理法のことである。

17) 講道館，前掲書，308 ページ。

18) Tetsujiro Shidachi, *op. cit.*, p.18.

〔志立は、この記事に対して、次のように反論している。「記者がロンドンの日本人村でみたものは、三流の柔術家の演技で、柔術とは何の関係もない」と (*ibid.*, p.19)。〕